

# 平成 2 1 年度病虫害発生予報第 4 号

平成 2 1 年 6 月 4 日  
鳥取県病虫害防除所

## 予報の概要

区 分	農作物名	病 害 虫 名	発生時期	予想発生量
普通作物	イ ネ	いもち病(葉いもち)	平 年 並	平 年 並
		縞葉枯病(ヒメトビウンカ)	やや遅い	少 ない
		ニカメイガ(第1世代)	やや遅い	少 ない
		イネミズゾウムシ	-	少 ない
果 樹	ナ シ	黒斑病	平 年 並	平 年 並
		黒星病	平 年 並	やや多い
		輪紋病	平 年 並	平 年 並
		アブラムシ類	平 年 並	平 年 並
		ニセナシサビダニ	平 年 並	平 年 並
		シンクイムシ類	やや早い	平 年 並
	カ キ	落葉病	平 年 並	平 年 並
		カキノヘタムシガ	平 年 並	やや多い
	ブドウ	べと病	平 年 並	平 年 並
チャノキイロアザミウマ ハマキムシ類(チャノコカクモンハマキ)		平 年 並 やや早い	平 年 並 平 年 並	
野菜・花き	スイカ、メロン	つる枯病、炭疽病	平 年 並	平 年 並
		うどんこ病	平 年 並	平 年 並
		アブラムシ類	やや早い	平 年 並
		ハダニ類	平 年 並	平 年 並
	イチゴ	うどんこ病	平 年 並	平 年 並
		アブラムシ類	平 年 並	平 年 並
		ハダニ類	平 年 並	やや多い
	ネ ギ	さび病	平 年 並	平 年 並
		黒斑病	平 年 並	平 年 並
		ネギハモグリバエ ネギアザミウマ	平 年 並 平 年 並	やや少ない 平 年 並
ブロッコリー	コナガ	平 年 並	やや多い	
シ バ	葉腐病(ラージパッチ)	平 年 並	平 年 並	
	シバツトガ	平 年 並	平 年 並	

### [ 参考 ]

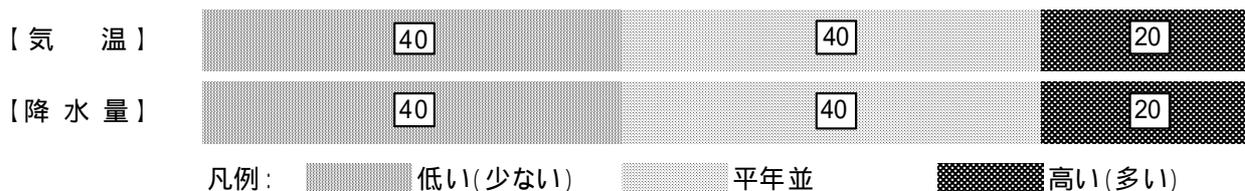
#### 気象予報(抜粋)

1 か月予報(予報期間:5月30日~6月29日、5月29日 広島地方气象台発表)  
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量の確率は以下のとおりです。

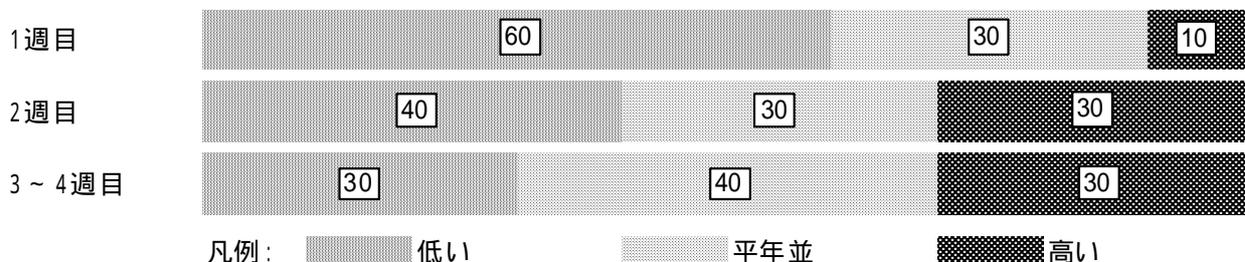
平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の気温は、平年並または低い確率ともに40%です。降水量は、平年並または少ない確率とも40%です。週別の気温は、1週目は低い確率60%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



## 普通作物

### 【イネ】

#### 1 いもち病(葉いもち)

##### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域  
発生時期 平年並  
発生量 平年並

##### (2) 予報の根拠

ア 昨年の穂いもちの発生は少なかったことから、種子の保菌率も低いと予想される。

イ いもち病に弱い品種の作付割合が約9割を占めている。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 移植後は、ほ場をよく観察して早期発見に努め、急性病斑がみられた時は、登録のある粉剤又は水和剤で直ちに防除を行う。

イ コシヒカリ、ひとめぼれなどの本病に弱い品種、多肥、遅植えなどの条件では特に発生しやすいので注意する。

ウ 補植用置き苗が本病の発生源となることが多いので、補植が終わったら放置せず、早めの処分を徹底する。

#### 2 縞葉枯病(ヒメトビウンカ)

##### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域  
発生時期 やや遅い  
発生量 少ない

##### (2) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気象予報から、第2世代幼虫のふ化最盛期は平年よりやや遅い7月第2～3半旬頃になると予想される。

イ 昨年の本病の発生量は少なかった。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

- ア 本病の常発地で、ヒメトビウンカに登録のある育苗箱施用剤を使用していない場合には、第2世代幼虫のふ化最盛期(7月第2~3半旬頃)に、登録のある粉剤や粒剤などを散布する。
- イ 本種はイネの葉色が濃いほ場に発生しやすいので、窒素過多にならないようにする。

3 ニカメイガ(第1世代)

( 1 ) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	やや遅い
発生量	少ない

( 2 ) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気象予報から、発蛾最盛期は平年よりやや遅い6月第4~5半旬頃になると予想される。
- イ 5月第5半旬までの予察灯及びフェロモントラップへの総誘殺数は、平年に比べて少ない。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

本種に登録のある育苗箱施用剤を使用していないほ場において、若齢幼虫期(6月下旬)に、要防除水準を超えた場合には登録のある粉剤などを散布する。なお、6月下旬における本種の要防除水準は、葉鞘変色茎率5%である。

4 イネミズゾウムシ

( 1 ) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生量	少ない

( 2 ) 予報の根拠

5月第5半旬までの予察灯への総誘殺数は、平年に比べて少ない。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

- ア 移植期の防除を行っていないほ場、又は移植期の防除を行っていても成虫の寄生数及び食害が多いほ場において、要防除水準を超えた場合には、登録のある粒剤や粉剤などを散布する。なお、本種の要防除水準は成虫寄生密度0.5頭/株である。

## 果 樹

### [ ナ シ ]

1 黒斑病

( 1 ) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

( 2 ) 予報の根拠

- ア 県予察ほ場(東伯郡北栄町)における5月第6半旬の孢子飛散数は、平年を下回った。
- イ 5月下旬現在、一部のナシ園の幼葉や幼果などで本病の発生が認められる。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 6月になると新梢葉が多くなり、薬液の付着むらが出やすいので、新梢の先端まで薬液が十分かかるよう注意する。
- イ 薬剤はジラム・チウラムフロアブル(ダイボルトフロアブル又はパルノックスフロアブル)500倍とポリオキシシラン水和剤1,500倍の混用液、チウラムフロアブル(トレノックスフロアブル又はチオノックスフロアブル)500倍とポリオキシシラン水和剤1,500倍の混用液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ナリアWDG2,000倍液などを使用する。
- ウ 園内の風通しをよくするため、下草の管理を徹底する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 県予察ほ場(東伯郡北栄町)における開花期以降の果そう基部病斑からの生子の飛散数は平年を下回った。
- イ 県内の一部では多発園が認められている。
- ウ 5月下旬現在、葉や幼果に発病が認められているナシ園では、今後、降雨が多くなると発病が増加することが予想される。
- エ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病した葉や幼果は取り除き、園外に持ち出し処分する。
- イ 赤ナシの有袋栽培では、袋掛け直前に必ず薬剤散布を行って袋掛けを行う。
- ウ 薬剤はアントラコール顆粒水和剤500倍液、オキシラン水和剤600倍液、ナリアWDG2,000倍液などを使用する。また、現在、発生が認められる園では、孢子形成阻害効果の高いEBI剤(アンビルフロアブル1,500倍液、マネージ水和剤4,000倍液、スコア顆粒水和剤4,000倍液など)を追加散布する。
- エ EBI剤の散布にあたっては、薬剤耐性菌の発生を回避するため、EBI剤以外の薬剤との輪番散布とする。

3 輪紋病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 伝染源となるいぼ病斑の発生の多い園が一部のナシ園で認められる。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 果実の発病は袋掛けで防げるが、袋掛けが遅れると発生が増加するので、摘果が終わり次第、早めに袋掛けを行う。
- イ 果実及び枝の発病を抑えるため、梅雨期の薬剤散布を徹底する。
- ウ 薬剤はオキシラン水和剤600倍液、ナリアWDG2,000倍液などを使用する。

#### 4 アブラムシ類

##### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

##### (2) 予報の根拠

ア 5月第6半旬現在、県予察ほ場におけるワタアブラムシの平均寄生新梢率は1.9%(平年:7.5%)、ユキヤナギアブラムシは同1.9%(平年:6.5%)となっている。

イ 5月19、20日の巡回調査の結果、アブラムシ類の発生は平年並~やや少ない。

ウ 向こう1か月の気象予報から、アブラムシ類の発生にやや好適である。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 発生が多いほ場では、アドマイヤーフロアブル5,000倍液又はウララDF4,000倍液などを散布する。

イ アドマイヤーは、薬剤抵抗性の発達を避けるため連用せず、年1回限りの使用とする。

#### 5 ニセナシサビダニ

##### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

##### (2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、県予察ほ場(東伯郡北栄町)におけるニセナシサビダニの新梢先端葉1枚当たりの寄生個体数は175.6頭(平年:163.5頭)で平年並となっている。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生最盛期は平年並の6月中旬頃と予想される。

##### (3) 防除上注意すべき事項

第2回目の防除は、発生最盛期の6月中旬頃を目安に実施する。薬剤はハチハチフロアブル2,000倍液などを使用し、ニセナシサビダニが寄生している新梢先端部に薬液が十分付着するように散布する。

#### 6 シンクイムシ類

##### (1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

##### (2) 予報の根拠

ア ナシヒメシンクイの越冬世代成虫(第1回成虫)の発生盛期は、県予察ほ場(東伯郡北栄町)で平年(4月中旬)よりやや早い4月上旬となった。

イ 現地9地点におけるフェロモントラップの誘殺数調査によると、ナシヒメシンクイの誘殺数が前年よりやや多い地点がみられている。

ウ 向こう1か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの第1世代成虫(第2回成虫)の発生最盛期はやや早い6月上~中旬頃と予想される。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 受粉樹に残っている果実など(裸果)はシンクイムシ類の発生源となるので、早急に除去する。

イ 防除暦を参考に定期的な防除を行う。

## [カキ]

### 1 落葉病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 昨年の本病の発生量は平年並であったため、越冬菌密度は平年並と見込まれる。

イ 本病は連続降雨により発病が助長される。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、落花始め～生理落果期に、有機銅フロアブル（キノドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1,000倍液、デランフロアブル2,000倍液、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤又はペンコゼブ水和剤）600倍液などを10日間隔でそれぞれ1回ずつ散布する。

### 2 カキノヘタムシガ

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

#### (2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、予察灯（鳥取市河原町）における誘殺数は平年に比べてやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、成虫の発生最盛期は平年並～やや早い5月末～6月初旬と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 落葉病の防除時期に合わせてパダンSG水溶剤1,500倍液などを散布する。

イ なお、パダンSG水溶剤は、開花後に発生するチャノキイロアザミウマにも効果がある。

## [ブドウ]

### 1 べと病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 本病は連続降雨により発病が助長され、施設栽培ではハウスの谷部など雨に当たりやすい場所での発生が多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 果粒が大豆大以上になると薬剤散布によって果粉が溶脱するので、果粒が小豆大までにアミスター10フロアブル1,000倍液又はストロビードライフフロアブル2,000倍液などを新梢先端や副梢に十分量散布する。

イ 本病の発生が多い園では、薬剤が果房に直接かからないように注意して、ランマンフロアブル2,000倍液、ホライズンドライフロアブル2,500倍液を輪番で散布する。

## 2 チャノキイロアザミウマ

### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）の黄色粘着トラップによる本種の誘殺数は、ほぼ平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生が増加する時期は、平年並の6月上旬頃と予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

例年発生の多い園では、モスピラン水溶剤4,000倍液、バリアード顆粒水和剤4,000倍液などを6月上旬～中旬に必ず散布する。ただし、果実に直接かかると果粉が溶脱する恐れがあるため、果房にかからないようにする。

## 3 ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ）

### (1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）の性フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの誘殺数は、ほぼ平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、平年よりやや早い6月下旬～7月上旬頃からふ化幼虫の発生が増加すると見込まれる。

### (3) 防除上注意すべき事項

防風樹のサンゴジュは本種の発生源になるので注意する。

## 野菜・花き

### [スイカ、メロン]

## 1 つる枯病、炭疽病

### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場（スイカ）における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は降雨によって発病が助長される。向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア トンネル内が過湿にならないように換気を行う。

イ 雨滴のあたる箇所や株元から発病しやすいので、雨がなるべくあたらないようにトンネルの開閉を行う。また、薬剤散布は株元にも薬液がよくかかるよう

に丁寧に行う。

ウ 雨の日が続くと発病が増加するので、散布間隔を短くし、雨のやみ間に防除する。

エ 防除薬剤は、スイカでは、ジマンダイセン水和剤400～600倍液、アントラコール顆粒水和剤400～600倍液、ダコニール1000の700倍液などを散布する。メロンでは、ジマンダイセン水和剤400～600倍液などを散布する。

## 2 うどんこ病

### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は、25 前後の気温と乾燥条件で発病が助長される。向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 既に発病のみられるほ場では、スイカ、メロンともにトリフミン水和剤3,000～5,000倍液などを散布する。

イ つる枯病も発生している場合には、スイカではポリベリン水和剤1,000倍液、メロンではポリベリン水和剤1,500倍液などを散布する。

## 3 アブラムシ類

### (1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（東伯郡北栄町）に設置した、黄色水盤における5月下旬までの有翅アブラムシ類の飛来量は平年並である。

イ 5月下旬現在、現地調査ほ場におけるアブラムシ類の発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスの換気部分や出入口には寒冷紗被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。

イ 防除薬剤は、DDVP乳剤50の1,000倍液、アドマイヤー水和剤2,000倍液などを散布する。スイカのハウス栽培で収穫間近なものは、ハチハチ乳剤1,000～2,000倍液、マラバッサ乳剤1,500倍液などを散布する。

## 4 ハダニ類

### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）におけるハダニ類の発生量は平年並である。

イ 現地調査ほ場におけるハダニ類の発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期にはニッソランV乳剤の1,000倍液、バロックフロアブル2,000倍液などを散布する。発生がやや多い場合は、カネマイトフロアブル1,000～1,500倍液、コロマイト乳剤1,000倍液などを散布する。なお、コロマイト乳剤は薬害が生じやすいので、他の薬剤との混用散布は避ける。

[イチゴ]

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場の育苗床における本病の発生量は平年並である。  
イ 本病は気温が20前後のやや低温条件で発病が助長される。向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本ほ場に病原菌を持ち込まないために、特に6～7月の育苗期間中の防除を徹底する。  
イ 防除にあたっては、葉裏へも薬剤が付着するように丁寧に散布を行う。  
ウ 防除薬剤は、発病初期まではベルコート水和剤1,000倍液などを散布する。既に発病している場合には、カリグリーン800～1,000倍液とバイコラール水和剤5,000倍液又はトリフミン水和剤5,000倍液を混用散布する。

2 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場(東伯郡北栄町)に設置した、黄色水盤における5月下旬までの有翅アブラムシ類の飛来量は平年並である。  
イ 5月下旬現在、現地調査ほ場の育苗床におけるアブラムシ類の発生量は、一部でやや多いほ場が認められるが、全体的には平年並である。  
ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤はベストガード水溶剤2,000倍液、サンヨール乳剤500倍液などを散布する。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場の育苗床におけるハダニ類の発生量はやや多い。  
イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ハダニ類の発生源となる畦畔雑草に対し、ハービー液剤200倍液を散布するなど除草に努める。
- イ 発生初期にニッソラン水和剤2,000~3,000倍液、オサダンフロアブル2,000倍液などを散布する。発生量が多い場合は、コテツフロアブル2,000倍液、コロマイト乳剤1,000~1,500倍液(親株床での登録)などを散布する。

[ネギ]

1 さび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。
- イ 本病は比較的低温で降雨が多い場合、発病が助長される。向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 6月に収穫する作型で、発病の多いほ場では、アミスター20フロアブル2,000倍液を散布する。
- イ 7月以降に収穫する作型では、6月上旬から、オンリーワンフロアブル1,000倍液、ラリー乳剤4,000倍液などを散布する。発病が増加する場合は、これらの薬剤にカリグリーン800倍液を混用して散布する。

2 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。
- イ 本病は気温が25前後で、降雨が多い場合、発病が助長される。向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 根傷みや肥料不足になると発病しやすいので、排水対策を実施し、肥培管理に注意する。
- イ 防除薬剤は、ダコニール1000の1,000倍液、ポリベリン水和剤1,500倍液などを予防散布する。発病後は、ロブラール水和剤1,000~1,500倍液などを散布する。

3 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 5月下旬現在、県予察ほ場(東伯郡北栄町)における本種の発生量はやや少ない。
- イ 現地調査ほ場での本種の発生量はやや少ない。

ウ 向こう1か月の気象予報から、やや少ない発生量が予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

定植時にはオンコル粒剤5の3～6kg/10a、ジノテフラン粒剤(アルバリン粒剤又はスタークル粒剤)6kg/10aの株元散布又はアクタラ粒剤5の6～9kg/10aの作条混和などの処理をする。粒剤の効果が切れた後は、アグロスリン乳剤2,000倍液などを散布する。

#### 4 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場での本種の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

定植時の粒剤処理は、ネギハモグリバエの項参照。粒剤の効果が切れた後は、アクタラ顆粒水溶剤1,000～2,000倍液、マラバッサ乳剤800～1,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液などを7～10日おきに散布する。なお、同一薬剤の連用は効果が低下するおそれがあるので避ける。

### [ブロッコリー]

#### 1 コナガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場(東伯郡北栄町)における本種の発生時期及び発生量は平年並である。

イ 6月上旬現在、現地ほ場における雄成虫のフェロモントラップ誘殺数、幼虫の発生量ともに平年に比べてやや多い。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 6月中旬以降収穫のブロッコリーで幼虫の発生がみられる場合、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液、ゼンターリ顆粒水溶剤1,000～2,000倍液などを散布する。

### [シバ]

#### 1 葉腐病(ラージパッチ)

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は降雨によって発病が助長される。向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 本病の発生前にセレンターフ顆粒水和剤 0.5 g / m<sup>2</sup>を 0.1 ~ 0.5 L / m<sup>2</sup>散布する。

イ 既にパッチがみられる場合は、発病部位を中心にグランサー水和剤 500 倍液 0.5 L / m<sup>2</sup>、バリダシン液剤 5 の 500 倍液 0.5 ~ 1 L / m<sup>2</sup>などをスポット散布する。

2 シバツトガ

( 1 ) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

( 2 ) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本種のフェロモントラップ誘殺数は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

幼虫による被害がみられる場合は、ダイアジノン乳剤 40 の 1,000 倍液 0.3 ~ 1 L / m<sup>2</sup>、ジェイエース水溶剤 1,000 倍液 0.3 L / m<sup>2</sup>、スミチオン乳剤 1,000 倍液 0.3 ~ 2 L / m<sup>2</sup>などを散布する。

**[おしらせ]**

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。( <http://www.famic.go.jp/> )

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、  
周辺への飛散には十分注意しましょう。**

**< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >**

**アドレス** <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報やフェロモントラップ調査結果(野菜の各種害虫、果樹のシンクイムシ類)、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしています。ご利用下さい。

**鳥取県病害虫防除所**

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647

E-mail : [boujyot@titan.ocn.ne.jp](mailto:boujyot@titan.ocn.ne.jp)

今回の予報発表は、7月2日(木)の予定です。